

「資本主義の夢」の消えた後に： 香港における広深港高速鉄道反対運動とその遺産

The legacy of protests against Guangzhou-Shenzhen-Hong Kong
Express Rail Link in Hong Kong

安藤 丈将*

Takemasa ANDO*

要約：本稿は、香港の広深港高速鉄道反対運動（反高鉄運動、二〇〇八～一〇年）が市民社会と社会運動に何を残したのかという問いを考察している。反高鉄運動は、高速鉄道の建設によって立ち退きを強いられた菜園村という小さな村の住民と外部からの支援者による抗議行動である。

一節では、一九九七年に中国に返還された後の香港の社会運動の展開を追い、反高鉄運動の生まれた歴史的な文脈を明らかにしている。「七一遊行」に代表される大規模イベントが繰り返し組織される中で、香港における脱政治的な文化に変化が生じた。

二節では、二〇〇八年十一月、政府による菜園村民に対する立ち退き通告後の運動の展開を跡づけている。支援者たちは、高鉄プロジェクトをめぐる不正義を問題にすると同時に、香港における支配的なイデオロギーである資本主義の開発に対する根源的な疑問を呈したことを論じた。

三節では、反高鉄運動の生んだ二つの遺産のうち、まず、非暴力直接行動の創出について論じている。「苦行」と呼ばれるユニークな路上の行動は、ローカルな運動がWTO反対運動のようなグローバルな運動と交錯する中で生まれた。本節では、「苦行」が慣習的なスタイルでは伝えにくい政治的主張を表現する方法であることを強調している。

四節では、もう一つの遺産である農の発見に焦点をあてている。支援者たちは、菜園村民の農を基盤にした生活に刺激を受けた。それは、自分の食べる物を自分で作り、余分にできた物を近隣住民や友人にシェアしたり、露地で売ったりする暮らし方である。彼らは、土地を商業施設や住宅施設に変えるのではなく、耕して種を植えて作物を収穫することで生きていくやり方を見出した。以上のように、本稿では、反高鉄運動が路上における政治的表現の手法と農を基盤にした生活のモデルという二つの遺産を生み出したことを明らかにした。

*武蔵大学社会学部教員

はじめに

二〇一八年九月二三日、中国大陸の広州と深圳を香港と結ぶ「広深港高速鉄道」が開通した。香港と広州との間の移動時間を最短四七分に縮める鉄道の開通には華やかな記念式典が催され、^{キャリー・ラム}林鄭月娥行政長官も式典に出席した。日本のメディアでも開通のニュースは報じられた。開通に伴い利便性が高まり、大陸との経済の緊密化が香港経済の拡大につながるという期待が記される一方、西九龍駅における「一地両検」問題に象徴されるように、香港の主権が脅かされるという主張も併記されている²。

メディア報道は共通して、高速鉄道が香港に経済拡大の希望と「中国化」の懸念という異なる反応を呼び起こしたと報じている。だが、報道からは、高速鉄道の建設に立ち退きを迫られた村民、建設に反対した都市住民の存在が見えてこない。本稿は、彼ら、すなわち、二〇〇八～一〇年の「広深港高速鉄道反対運動（反高鉄運動）」に関わった人びとに注目し、高速鉄道に関する知られざる側面に迫りたい。

ビジネスと観光の都市という一般的なイメージからはかけ離れているが、実は香港は社会運動の盛んな場所である。「デモの都」という隠れた呼称が存在するほど、人びとが路上に集まって政治的に表現する姿をしばしば目にできる。二一世紀に入ってから数多くの大規模な社会運動のイベントが繰り返されてきたが、その中でももっとも広く注目を集めたのは、「雨傘運動³」として知られる二〇一四年の民主化運動であろう。

Anthony Dapiran が言うように、雨傘運動は、「孤立したイベント」として扱われるべきではない (Dapiran 2017 : 9)。それは、一九九七年に中国に返還された後の香港における市民社会と社会運動の歴史の蓄積から生まれたものである。したがって、雨傘運動は、その歴史的な脈に位置づけられるべきだ。そこで、二一世紀における香港の社会運動史をたどっていくと、反高鉄運動に出会う。反高鉄運動は、雨傘運動、東北開発反対運動⁴

などその後の運動に大きな影響を及ぼした。

たとえば、甘傘運動のリーダーの一人である ^{ジョシュア・ウオン} 黃之鋒 は、反高鉄運動の時に一四歳であり、その運動に直接参加したわけではなかった。しかし彼は、高鉄の問題をニュースで読み、自らが政治問題に意識を持つようになったきっかけとなる出来事としてその運動を位置づけている（Wong 2015 : 44）。本稿は、この反高鉄運動について考察する。それがいかなる過程をたどったのかを跡づけながら、香港の市民社会と社会運動の文脈に位置づけることで、この運動の遺産を明らかにするのがねらいである⁵。

一節 返還後の社会運動：反高鉄運動前史

反高鉄運動は、返還後の社会運動から影響を受け、二〇一〇年代の運動に影響を及ぼした。二一世紀に入ると、香港では社会運動の大規模イベントが続出している。一つのイベントがメディアで大きく取り上げられ、新しい参加者を生み、次のイベントの動員につながるという循環を生み出してきた。

広範な人びとの参加を呼び込んだことでは、二〇〇三年七月一日の「七一デモ（七一遊行）」が知られている。これは、香港政府が国家安全条例の制定を企図したことに対する大規模な抗議行動である。香港基本法は、二三条で香港政府が政権転覆等を禁止する法律（国家安全条例）を制定するよう定めている。これに基づき、香港政府は、条例の制定を模索し、二〇〇二年九月からパブリック・コメントの聴取を開始した（遊川 2017 : 91-94）。だが、国家安全条例の制定は、それによって市民的自由を縮減される人びとの間に不安を高めていった。

中国に返還されて七年目の日、「民間人権陣線（Civil Human Rights Front）」という運動のネットワーク組織が主催したデモは、ヴィクトリア・パークを出発した。セントラルの政府庁舎に至るまで人びとが続々と加わり、最終的には五〇万人超（主催者発表）に膨れ上がっている。香港においては、

一九八九年六月の天安門事件に対する抗議デモに約一〇〇万人が集まって以来の大規模なデモになった。参加者が^{トン・キンワ}董建華 行政長官を批判したTシャツを着るなど、「七一デモ」は、反政府のメッセージが色濃く現れるものであった(遊川 2017: 95)。

翌年から「七一デモ」が慣例化した。その他にも運動の大規模イベントが続き、二〇〇五年一二月には、反 WTO イベントが開かれている。一二月一三～一八日、WTO 閣僚会議が開催されたのに合わせて、香港の社会運動のネットワークである「民間監察世貿聯盟 (HKPA)」がイベントを主催した。イベントには香港内のみならず、各国の反グローバリズム運動のグループが参加しているが、特に韓国の農民団体は一〇〇〇名を超える代表団を送り、行動の中でもひととき目立つ存在であった。連日、WTO 閣僚会議関連のニュースが香港のメディアで報道され、WTO に対する香港の人びとの関心を喚起している。反 WTO イベントは、後述するように、反高鉄運動に行動のヒントを残した。

さらに、二〇〇六～〇七年にかけては、ヴィクトリア港にあるスターフェリーピアとクイーンズピアという二つの埠頭の保衛運動に注目が集まった。ヴィクトリア港は、香港島北部と九龍市街地という都心部に位置し、人と物が交錯する重要なルートである。一九九〇年代から、ヴィクトリア港の埋め立てによる再開発事業が進められ、その中でフェリーターミナルの取り壊しと機能移転がなされることになった(福島 2009: 73-74)。二〇〇六年末、文化遺産の保全、景観の破壊という観点から反対世論が高まった。後に反高鉄運動にも参加する二〇～三〇歳代の青年から構成された「本土行動 (Local Action)」というグループが、埠頭保衛運動を牽引して注目されている。最終的にピアは取り壊されたが、埠頭保衛の問題は、連日、メディア上をにぎわせ、問題の所在が人びとの間に広く知られるところになった(福島 2009: 85-86)。

「七一デモ」に始まる大規模イベントは、反高鉄運動につながる遺産を市民社会に生み出した。その遺産は、次の四点にまとめることができる。

第一に、社会運動のネットワークの構築を挙げられる。そのハブとして機能してきたのが、二〇〇二年九月に創設された「民間人権陣線」である。それは、国家安全条例に懸念を抱く市民組織、専門家組織、政治グループ、社会組織の連合である。民主派政党も、民間人権陣線と緊密な関係を築くことで、香港の議会である立法会と社会運動を接続する役割を果たした。

民間人権陣線は、創設当時、二〇団体程度の参加であったが、二〇〇三年の「七一デモ」を組織したことで、市民社会における認知が高まった。政府の二三条立法への対応は、様々な市民社会組織の間に懸念を引き起こした（Lee and Chan 2012 : 46）。そのため、民間人権陣線には、宗教組織やLGBT組織のような、その活動が直接には国家安全条例に関わらないように見えるグループが参加している。それは、時に個別の 이슈に関する見解を異にすることはあっても、香港の民主化という大きな目標を共有する、緩やかな連合体である。

「七一デモ」は、毎年恒例のイベントになることで、人びとが安心して参加できる場として位置づけられた。さらに、その存在は、テレビや新聞のような大手メディア上においても民主化の問題に関する記事の一定のスペースを確保することにもつながった。

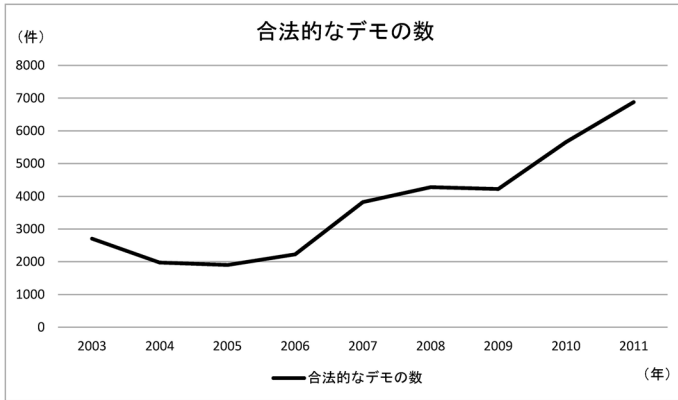
第二に、体制批判的なメディア空間の形成である。香港メディアについての研究者が指摘するように、香港には、メディア界にリベラルな考え方が浸透している。歴史を振り返ってみると、清朝の時代、日本占領期、中国共産党と国民党の対立の時代のすべてにおいて、香港は政治活動家が雑誌を創刊して、自らの主張を広める場であり続けてきた（Lai 2007 : 155-56）。こうした背景もあって、ジャーナリストは、自らを政治権力から独立した存在であると見なしている。彼らは、政府や大企業を監視し、市民に適宜正確な情報を送ることを任務であると考えてきた（Lee and Chan 2012 : 34）。インターネットの普及とともに誕生したネットメディアは、主流メディアの外側で批判的な論調を生産し、より多元的な言論空間の構築に寄与した。

批判的なネットメディアの代表としては、「香港獨立媒體⁶ (Inmedia)」が知られている。獨立媒體は、二〇〇四年の「七一デモ」後に設立された。反WTO運動、保衛運動の時がそうであったように、それは、主流メディアの取り上げないアクティヴィストの主張を伝える役割を果たした。その役割は、反高鉄運動においても続いた。朱凱迪、葉寶琳、周思中、陳景輝ら、反高鉄運動の中心的な組織者は、獨立媒體の記者でもあり、ウェブ上で運動に関する情報を発信した。ネットメディア出現以前には、集会やデモのような運動に関わる情報は、ネットワークの構成組織を介して拡散するというのが一般的であった。「七一デモ」の頃には、それ以外に人びとがネット上で情報を入手し、行動に参加するという方法も一般的になっていった(蔡 2015 : 85)。

第三に、香港における従来の政治文化の変化である。香港政治の研究者は、香港の「脱政治的」な文化の存在を指摘してきた。この見方によれば、香港の人びとは、主に移住者から構成されていて、移住者は香港を「借りてきた土地」と見ているため、政治活動には深くコミットせず、経済活動に集中する。このような政治文化論の典型が、Lam Wai-Man の議論である。彼女によれば、香港では「(政治的) 安定」と「(経済的) 繁榮」が最優先され、政府に反対する人びとは、「トラブルメーカー」というレッテルを付与されて、周辺化されてきた。人びとの生活上の問題が起きたとしても、それが政治と結びつけられることはなかった(Lam Wai-Man 2004 : 211)。

Lam Wai-Man が言うように、この文化が冷戦の中で形成されたという点は重要である(Lam Wai-Man : 219)。一九八四年の中英基本合意がそうであるように、香港の住民に強い影響を及ぼす政治的な決定は、イギリスと中国のような大国間の交渉でなされ、彼らの手の届くものではなかった。それゆえに、香港の人びとは、自分たちが決定を行使しやすい経済に関心を寄せ、他方、経済的な繁榮を揺るがすような政治的行動にはブレーキをかけるという選択をしてきたのである。

だが、「七一デモ」以降、香港における脱政治的な文化に変化が生じた。



（鄭煒 2018：41）をもとに作成

図表 1 2003 年以降の合法的なデモの数

年月日	イベント名（イシュー）	主催者	参加人数
2003 年 7 月 1 日	七一大遊行（23 条立法）	民間人権陣線	50 万人以上
2004 年 1 月 1 日	元旦大遊行（民主主義）	民間人権陣線	10 万人
2004 年 7 月 1 日	七一大遊行（普選）	民間人権陣線	53 万人
2005 年 12 月 4 日	奪取普選大遊行（普選）	民間人権陣線 & 泛民主派	25 万人
2009 年 6 月 4 日	六四ヴィクトリアパークキャ ンドル集会（天安門事件）	支聯會	15 万人

（蔡 2015：98-99）をもとに作成

図表 2 2003～2009 年における大型の社会運動イベント（主催者発表で参加者 10 万人以上）

人びとは、政府や立法会の決定を所与のものとして、路上に出て自ら政治的表現をすることが慣例化した。このことは、デモ数と大規模イベントの増加に明らかである（図表 1、図表 2 参照）。こうして、今日では「デモの都」と呼ばれるほど、香港は、路上の抗議行動の盛んなことで知られるようになった。

李峻嶸が言うように、路上における政治行動には、自由な空間の享受という意味合いがある。中国に返還された後の香港において、人びとは、政

治的自由の喪失の恐怖に脅かされてきた。彼らにとって、天安門事件のような政治弾圧は、海の向こう側の出来事ではない。その記憶は香港の人びとの間に強く残り続けており、政治的自由とは空気のように常にそこにあるものではない。参加者は、路上を歩きながら、弾圧されず自由に意見を発することのできる喜びを感じている(李峻嶸 2015: 108)。

第四に、民主主義の理解の深化である。そもそも、香港には、政治学において言われるところの民主主義の制度が確立していない。そのため、「七一デモ」後の民主化運動は、普通選挙の実現のような民主的な政治制度の確立を要求していた。香港基本法は、将来、香港において普通選挙を実施することを規定している。だが、それがいつであるかは中央政府の裁量に任されており、普通選挙は返還後二〇年たった今日においても実現の目途が立っていない。こうした状況から、民主化運動においては、普通選挙の実現が最大公約数の目標として掲げられている。

しかし、「七一デモ」以降の運動には、普通選挙の実現を目指すだけではなく、民主主義の意味を再定義するという側面も有していた(Le and Chan 2012: 16)。アクティヴィストたちは、民主主義=代表制という理解を超えて、より直接的な政治参加を求めたのである。実際、運動は、目に見える政治的成果も獲得してきた。「七一デモ」のターゲットであった国家安全条例は、批判の声の高まりを受け、二〇〇三年九月五日、撤回を余儀なくされた。当時の行政長官の董建華は求心力を失い、二〇〇五年三月に任期途中で辞任している(遊川 2017: 96)。

また、「七一デモ」以降の運動は、「香港人」という政治的なアイデンティティの意識を高めたことも、民主主義に関連して重要である。アイデンティティの問題は、とりわけ埠頭保衛運動において広く注目を集めた。取り壊しの対象とされたスターフェリー・ピア(天星碼頭)は、一八八八年に運航を開始し、中環と尖沙咀の間の往来に使われてきた。一九七〇年代以前はヴィクトリア港を渡る手段が他になかったので、この埠頭は、その利用者が必ず通過したり、待ち合わせ場所として利用したりする場所であった。

それは、自動車やMTR（Mass Transit Railway, 鉄道）用の地下トンネルが建設された後も変わらず、人びとの日常の風景の一部であり続けてきた（福島 2009 : 78）。

このような香港の人びとの間に共有される記憶は、「集體記憶（集合的記憶）」という言葉で呼ばれ、埠頭保衛運動の中で繰り返し語られた。集合的記憶をめぐる議論は、イギリス植民地時代に対するノスタルジーをはらみながらも、中国人とは区別される、「香港人」というアイデンティティに対する関心を呼び起こすものであった。香港人としての意識は、今日では、運動の枠を超えて、広く市民社会に共有されている。そのことは、たとえば、香港大学・世論調査プログラムの世論調査に表われている。自分を「香港人」とする回答者は、二〇〇〇年代前半に下がり続け、二〇〇八年六月には一八・一％であったが、北京五輪後に増え始め、二〇一〇年代には四〇％に達するに至る⁷（二〇一八年六月調査では四〇・七％）。

香港アイデンティティの高まりとともに、民主主義の政治単位としての香港という見方が浸透していった。以上のように、「七一デモ」後の市民社会において、民主主義をめぐる議論の活性化とその理解の深化が後に残った。反高鉄運動は、こうした歴史的な文脈の上にあるのだ。

二節 菜園村と反高鉄運動

反高鉄運動は、二〇〇八年十一月一日の出来事をきっかけにしている。この日、地政總署（Lands Department）の役人が新界の石崗菜園村の住民に対して、彼らの居住地が広深港高速鉄道の緊急避難駅の予定地に決まったと告げ、二〇一〇年十一月までに立ち退くことを求めた（Chiu and Li 2014 : 31）。高速鉄道は、中国の広州から深圳を經由して香港（九龍の中心部）に至る路線の建設が計画されており、深圳まではすでに開通していた。計画の起源をたどれば、高速鉄道の延伸計画は、二〇〇〇年に香港政

府から提案されていた。二〇〇五～〇七年にかけての立法会での議論を経て、二〇〇七年八月に行政長官が計画を進めることを宣言した (Chiu and Li 2014 : 29-31)。二〇〇八年に入ると、計画が急ピッチで実行に移される中、菜園村の住民に立ち退きが申し渡されている。

出来事の舞台—菜園村

出来事の舞台になった石崗菜園村とは、いかなる場所であったのか。菜園村は、香港北部、中国の国境に近い「新界」と呼ばれる地域の西部にある。新界は、一八九八年、清からイギリスに九九年の期限で租借された。香港の植民政府の高官であったジェームス・スチュワート・ロックハート (James Stewart Lockhart) は、一八九八年八月、租借されたばかりの新界に一二日間の旅をして、「大きな違い」に驚いている (Hayes 2006 : 1)。その違いの一つは、中国東南部の伝統的な習俗の残存である。植民者の目から見ると、新界は、イギリス本国だけでなく、香港島や九龍半島とも違う、まさに異境であった。

伝統的な習俗の守り手が、「(新界) 原居民」である。彼らは、新界がイギリス植民政府に租借される以前から、この地の政治、経済、文化に大きな影響を及ぼしてきた。「原居民」は、宗族社会を形成している。彼らは、宗族ごとに分かれて暮らし、古くから伝わる祭祀や儀式を司ってきた。土地のような経済的な権利は、男系子孫が継承することで、自らの宗族を再生産している。彼らの多くは、かつては農耕を営んでいたが、第二次世界大戦後、状況は変化した。「原居民」は、土地を外部者に貸与して収入を得る一方、自らはその土地を離れて暮らすようになったのである (朱凱迪 2012 : 157)。

「原居民」は、現地の経済社会の有力者であるばかりではなく、強力な政治的行為者でもあった。彼らは、村代表や郷事委員会といったコミュニティの自治組織を支配してきた (Hayes 2006 : 167)。

一八九八年から九九年間、新界は、イギリスの「租借地」であり、香港

島や九龍半島が「割譲」されたのとは、異なる扱いを受けてきた。それは、イギリス植民者にとって、新界の統治が困難を極めたからである。たとえば、先述のロックハートは、新界の状況を調査した際に、錦田村で村民から野次られ、臭いにおいのする卵を投げられた。さらに、村民から入村を拒否されている。結局、武装した七五名の兵士を動員し、入村したのだが、村民からの抵抗は、これにとどまるものではなかった。一八九九年三月、植民者は新界の大埔墟に塔を建て、最初の旗揚げ、接収管理を宣言する儀式を行なった。その際、村民は、風水を破壊するという理由で建設に反対した。彼らは、イギリスの警察官を襲い、各村で武装行動を展開した（張少強 2016 : 21）。

村民の抵抗を制御しきれなくなったイギリス植民政府は、村落の指導者層である「原居民」を取り込むという方法を選んだ。彼らの権利を保護することで、統治の協力を得たのだ。両者の交渉は、最終的に、一九一〇年の「新界条例」にて、植民政府から土地の権利を認められた者が地代収入を得ることで決着した（張少強 2016 : 28）。その後も、「原居民」は、圧力団体として事あるごとに自らの権利の保証を求めてきた。中国返還後にも、香港基本法四〇条で、新界における「原居民」の「合法伝統權益」の保護を規定する項目が挿入されている（張少強 2016 : 229）。

張少強は、イギリス植民政府と「原居民」との関係を「共謀式殖民主義（共謀式植民地主義）」と呼んでいる（張少強 2016 : 7）。それは、「間接統治」の名のもと、伝統的な風俗を保護し、現地の父権制を温存することで、「原居民」を植民地主義の「共謀者」にするという統治の手法である。こうして、新界の村民は、イギリス植民者から自らの權益を保護することに成功した。ただし、植民政府から守られていたのが、「原居民」という一部の村民の権利（特権）に限られていたことに注意を払う必要がある。新界の父権制において、權益を享受できるのは、（男性）継承者であり、それ以外の男性や女性には権利が付与されない。加えて、後から村にやってきた人びとも、保護された權益の享受者から外されている。

高速鉄道の建設で立ち退きを迫られた菜園村の住民は、非「原居民」であり、新界の父権制の恩恵には授かっていない。彼らの多くは、一九五〇～六〇年代に主に中国大陸からやって来た移民である。土地の所有権を持っておらず、賃料を払って土地を借り、そこに家を建て、生計を立ててきた。彼らが、政府からの突然の通知を受け、困惑した後、立ち退きに反対し、その土地に居続けられるよう政府に求めたのだ。

以下では、二〇〇八年十一月に菜園村の住民が突然立ち退きを迫られてから、二〇一〇年一月に高速鉄道の予算が立法会を通過するまでの反高鉄運動の展開を概略しよう。

政府の突然の通知に対して、村民は、反対の意を示した。それにもかかわらず、政府による公聴の期間は、二ヶ月しかなく、建設計画の進行が既定路線であるのは明らかであった。村民たちは、二〇〇八年二月、「菜園村關注組(菜園村憂慮グループ)」を結成し、「不還不拆(立ち退きはしないし、排除もさせない)」をスローガンに掲げ、計画の撤回を求めた(Chiu and Li 2014 : 31)。

反高鉄運動において目立ったのは、村外の支援者の活躍である。彼らは、二〇〇九年二月、「菜園村支援組(菜園村支援グループ)」を結成した。そのメンバーには埠頭保衛運動から引き続き運動に関わる人びとも含まれ、一九八〇年代生まれの若者が運動の中心になったため、「八十後反高鉄青年(八〇年後反高鉄青年)」と呼ばれた。二〇〇九年四～五月、二度目の公聴期間中に、彼らは、元朗、屯門、旺角などの路上に出て計画の見直しを求める署名を集め、また、菜園村ガイドツアーを組織して、村外の住民の関心を喚起した。こうして、政府の通知に反対する署名は一万三七〇〇に達したが、六月二九日の協議でも、政府は村民の訴えを無視した(Chiu and Li 2014 : 32-33)。

だが、村外の支援者の活躍によって、菜園村の問題はメディアに注目され、香港全体の問題として捉えられるようになる。まず、環境保護団体が、建設計画が深刻な環境破壊を引き起こすとして問題提起をした。さらに、

外部からの支援者が次から次へと小さなグループを組織し、菜園村を訪れ、反高鐵運動に参加する流れが生まれた。ガイドツアーは、メディアを通して事件を知った村外ののびとに、菜園村を訪れ、実際に村民の話聞き、彼らの生活を体感する機会を提供した。

二〇〇九年一〇月から二〇一〇年一月にかけて、高速鉄道に反対する大規模イベントが企画された。この時期には、個人ベースの「八〇年後反高鐵青年」に加えて、教会団体や人権団体など社会運動グループのネットワークである「反高鐵・停撥款大聯盟」も組織された。一〇月一八日には菜園村の集会（「千人合照怒撐菜園村」）、十一月二九日にはデモ行進（「1129 反高鐵・停撥款大遊行」）、十二月一八日には立法会包圍行動（「1218 請假包圍立法會」）、二〇一〇年一月八日には再び立法会に向けた行動（「1月8日全民Big爆立法會」）など、一二月から一月にかけて次から次へと抗議行動が組織されている。その都度、数千から時に万に達する参加者を呼び込み、それがメディアに報じられ、社会的な注目を集めた（Chiu and Li 2014 : 34-35）。

二〇一〇年一月一五日、一万人以上が立法会の建物にデモ行進をするが（「115 萬人決戰立法會反高鐵抗爭嘉年華」）、その翌日、高速鉄道の予算が立法会の財務委員会で承認された。巨大な抗議の波をつくり出したものの、運動は、高速鉄道の計画を頓挫させることができなかった。その後、住民は、村を立ち退いている（Chiu and Li 2014 : 35）。

菜園村の住民の支援者は、学生（大学生、大学院生など）、フリーランスの労働者（ライター、翻訳家、映像制作など）、正規の労働者（教師、ソーシャルワーカーなど）、職業はまちまちであるが、その多くが一九八〇年代生まれであった（一九七〇年代後半生まれも含まれている）。このグループのメンバーであった陳景輝によれば、菜園村民の支援者の会議において、一九八〇年前後生まれのメンバーが揃っていることが話題になり、「八〇年後反高鐵青年」というグループ名が決まった。そもそも、「八〇年後（八十後）」という世代の括り方は、中国大陸で形成された言葉である。大陸

で「八〇年後」は、「一人っ子政策」の世代を指し、わがままで甘やかされている世代という、否定的な意味を帯びていた。これに対して、陳景輝たちは、香港の慣習的な価値を刷新する新世代という肯定的な意味を「八〇年後」という言葉に付与し、自分たちのアイデンティティを示すものとして使ったのである⁸。

支援者たちは、直接立ち退きを迫られた村民ではない。それにもかかわらず、その抗議行動への関与は、献身的なものであった。彼らは、自らの利害には必ずしも直結しないように見える高速鉄道の延伸計画に、なぜ、反対したのであろうか。メディア上では、支援者たちの動員の背景として、彼らの世代の抱える経済的な不満が強調された。それは、「八〇年後」の世代が先行する世代よりも経済的に不利な立場に置かれたことに対する不満から運動に参加しているというものだ (Wu 2010)。この言説には、運動の主張を経済的要求というわかりやすいフレームに強引に押し込もうとしている点に問題がある。以下では、「八〇年後反高鉄青年」の発行したチラシを見ながら、彼らの主張に即す形で問題意識を理解してみよう。

支援者たちが反高鉄運動に関わった理由に関して言えば、第一に、政府に対する不信を挙げられる。彼らは、政府の高速鉄道プロジェクトが浪費に他ならないと言う。二〇〇九年一二月、立法会は、高速鉄道建設に必要な予算が、六六九億香港ドルに達するという見積もりをした。支援者たちは、これがいかに巨額であるかを示した。たとえば、彼らは、もし政府がこの金額を使えば、現在の電気代の補助措置を一六年継続できる、六五歳以上の高齢者に一〇〇〇ドルの給付金を三〇年間出せる、「差餉」という不動産の間接税（利用者に課される）を香港全戸六年間免除できると主張した（「反高鉄・叫停立法會撥款・開放討論」のチラシ）。これらの例から、彼らが高速鉄道のような大規模公共事業の代わりに、社会福祉の充実に税金を使うことを求めているのが分かる。

彼らが言うように、高速鉄道以外にも香港と大陸との間の交通手段は存在する。香港と深圳との間にはバスが頻繁に運行しているし、MTR も利

用できる。広州のように、香港から離れた場所に行く場合にも、空港から飛行機が飛んでいる。政府は、喫緊に必要なにもかかわらず、自然や人びとの生活の破壊を引き起こす恐れのある高鉄の建設を強行しようとしている。支援者たちは、こう主張した。

「八〇年後反高鉄青年」は、政府の強行路線が、香港における民主主義の欠落を象徴していると見ていた。世論の批判を受けて、立法会の地区直選議員の多数は反対の意を示していたにもかかわらず、計画の推進を主張し続けたのが、「功能組議員⁹」である（この後に述べるように、彼らは、高速鉄道の建設による最大の受益者だ）。立法会の決定は、功能組議員の意向を強く反映するため、地区直選議員の意向は無視された（「1月8日全民 Big 爆立法會」のチラシ）。

第二に、支援者は、高鉄の建設が「公義（正義）」に反すると言う。「八〇年後反高鉄青年」は、結局、高速鉄道がエリート（親北京の議員、工商界）を潤わせるに過ぎないと見ていた。支援者によれば、政府は、高速鉄道が公共の利益に合致すると言っているが、それは方便にすぎない。彼らは、エリートがケーキを分配する合成写真（「分餅」）を作成して、問題の所在をわかりやすく示した。その合成写真には、何鐘泰、林劍峰、方剛、石禮謙、霍震霆、劉皇發、陳茂波といった功能組議員たちが、ケーキを分けて食べる絵が描かれている。その裏側で、菜園村民のコミュニティの破壊が引き起こされているのだ（林、黄 2015 : 145）。このように、支援者たちは、高鉄問題が香港における不平等の存在を象徴的に示すものであり、その不平等を正すことを求めている。

「正義」ということでは、香港の「中国化」の問題も見逃せない。「八〇年後反高鉄青年」は、高速鉄道によって、香港が拡大する中国経済に統合されると見ていた。すでに二〇〇三年に「CEPA¹⁰（中国本土・香港経済連携緊密化取り決め）」が締結されており、それ以降、香港と中国大陸との間の人、物、金の移動がより頻繁になっている。中国との関係緊密化によって、アジア通貨危機や新型肺炎 SARS（重症急性呼吸器症候群）の

流行後の経済停滞を脱することはできた。だが、経済における香港の「中国化」という新たな憂慮が、人びとの間に広がることになった。

この憂慮が政治や文化の領域にまで拡大していくのは、雨傘運動の後のことである。西九龍駅における「一地両検」のような、香港の主権の問題により大きな注目が集まるのも、しばらく先のことである。それでも、経済を中心にした香港の「中国化」に対する懸念は、すでにこの時期に見て取れる。

第三に、「発展（開発）」に対する根本的な疑義である。香港政府は、高速鉄道の経済効果を強調した。二〇〇八年八月の政府広報によれば、高速鉄道は、二〇二〇年に一日一〇万人、二〇三〇年に一日二万人の利用者を輸送し、次の五〇年間で八三〇億香港ドルの経済利益をもたらし、建設期間中には五〇〇〇人の、運行開始後はさらに一万人の雇用を生むとのことである¹¹。政府の主張によれば、香港は大陸経済との関係が緊密になっており、もはや逆行はできない。高速鉄道は、旅行、小売、飲食などを含めた経済の波及効果が大きく、香港経済の「発展」につながる（林、黄 2015: 140）。結局、高速鉄道の推進者は、大陸の開発の成果の恩恵を受けることで、香港経済の拡大を目指しており、高速鉄道の建設は、そのための方法として位置づけられている。

このような主流の言説に対して、「八〇年後反高铁青年」は、政府の出す発展の計画が「持続可能」ではないと主張した。彼らによれば、自然豊かな新界の村を貫通させる高速鉄道の建設は、地球資源を破壊、消耗するものである。彼らは、経済の拡大の追求に終わりが無いことを強調する（「1月8日全民Big爆立法會」のチラシ）。

また、「八〇年後反高铁青年」は、高速鉄道が香港の人びと全体ではなく、一部のエリートを高速で大陸に運ぶためのものであると見ている。それと同時に、彼らは、高速鉄道が香港における便利さと速度を追い求める生活の象徴であるとも言う。高速鉄道の推進者は、それが「一小時生活圈（一時間生活圈）」、すなわち、珠江デルタ（香港、広州、深圳などを結ぶ三角

地帯)を一時間で往来できる生活圏をつくり出すとアピールしていた。こうした政府の宣伝に表われているように、香港の支配的な言説では、「快(早さ/速さ)」という言葉に肯定的な価値が付与されている。

他方、支援者のグループである「香港慢慢發行動組(Slow Development HK)」は、「快」が抱える問題を指摘する。「快」には、大量の浪費と汚染、ゴミの排出といった都市問題を伴うというのが、彼らの主張だ。その一方で、支援者たちは、「慢(遅い/スロー)」という言葉で未来のあるべき態度に掲げる。「慢」は、動きが鈍いとか、変化が遅いといった否定的なことばかりを必ずしも意味しない。彼らは、その言葉に、コミュニティ、生態系、環境、土地を基盤にして生きるという(肯定的な)意味を加える。彼らは、「快」の象徴であるマクドナルドやセブンイレブンにおける雇用が人間に尊厳を与えてはいないと言う。それゆえに、香港慢慢發行動組は、香港における「慢發(スローな発展)」を提案し、そこに希望を見出していた(「提低廣深港高速鐵路」のチラシ)。

先出の陳景輝は、次のように言う。政治家たちは、もし高速鉄道が建設されたら、香港と大陸が近くなり、労働者が香港を朝出て大陸に仕事に行き、夜に香港に帰ってくることも可能になる。そうすると、彼らにとって香港は寝る場所でしかなくなる。高速鉄道は、「速度」と「可動性」という香港に主流の価値を象徴している。これに対して、菜園村の住民は、その土地に根ざして暮らし、「時間の蓄積」をしてきた¹²。彼によれば、菜園村の破壊は、「速度」と「可動性」の価値の支配によって引き起こされたのだ。

「発展」の無条件の肯定に対する疑問は、「八〇年後反高鉄青年」に共有されている。反高鉄運動に参加した黃衍仁(一九八五年生まれ)は、自分たちが一九九〇年代以降の経済停滞の中で成長した「資本主義の夢」の消え去った後の世代であると言う。それだからこそ、今までの成功体験を反復するのではなく、先行する世代とは違う価値観や生活様式を生み出すことを目指してきた。こう彼は主張している¹³。

三節 非暴力直接行動としての「苦行」

反高鉄運動は、香港の社会運動に様々な遺産を生み出した。以下では、その遺産を、二つの視点から論じていく。一つは、本節で論じていくように、「苦行」という非暴力直接行動である。もう一つは、次節で論じる農を基盤にした生活の発見である。

先に言及したように、二〇〇九年、高鉄の計画が着々と進み、政府も立法会も村民の声に耳を傾けない状況の中で、支援者たちは、路上において様々な行動を繰り広げ、高速鉄道の問題に対する人びとの関心を喚起した。もちろん、その行動には村民も参加したが、それを中心となって企画、実践したのは、街頭行動に慣れている支援者たちであった。

様々な行動の中で、もっとも注目を集めたのは、「苦行」である。「苦行」は、デモ行進のスタイルの一つであり、参加者は一列に並び、前を行く参加者との間に少しスペースを開けて位置取り、太鼓の音に合わせて、足を一歩ずつ前に進める。二六歩進んだところで、膝をつき、頭を下げ、両手を上に掲げる。「二六」という数字は、香港の領域内における高速鉄道の長さが二六キロであることに由来している。靴を履かず裸足のままで歩き、両手に米と種籾を持つのが、「苦行」のスタイルである。

当時、香港中文大学の学生であった陳秉鳳によれば、「苦行」を実践する前、支援者たちは、様々な手立てを尽くしたが、立法会の予算の決定を止めるには至らなかった。何とかして高速鉄道の計画をストップさせるために話し合いを重ねた結果、「苦行」を実践することを考えついた¹⁴。

最初に「苦行」が実践されたのは、二〇〇九年一月一八日の立法会包囲行動の前のものである。二回目は、二〇一〇年一月五～八日であり、「八〇年後反高鉄青年」のメンバーたちは、「四日三夜」の「苦行」を実践した。彼らは、八日の「反高鉄・停撥款1月8日全民BIG爆立法會」の行動に合わせて、香港各地を「苦行」して回った。五日、新界東部の上水や大埔

に始まり、次に、六日には新界西部の元朗と荃灣、七日には九龍半島の南部に移り、八日に香港島の金鐘の観光客や通勤客の前を歩いた¹⁵。最後は、高速鉄道の予算が立法会を通過する直前、学生を中心に立法会の建物の周辺で行なわれた。

「苦行」という抗議レパトリーには、次の五つの特徴がある。第一に、「苦行」は、香港の運動とグローバルな運動との出会いから生まれている。「苦行」の企画者たちが言うように、それは、二〇〇五年一二月に香港で開催された反 WTO 行動に触発されたものである。その主役になった韓国農民は、鮮やかな直接行動を繰り広げた。まず、会議初日の一三日に、彼らは、コンベンションセンターまで遠泳をした（Lo 2006 : 147）。海に囲まれたコンベンションセンター周辺の道は、警察に封鎖されていたので、徒歩で会場に近づいて抗議することができない。そこで韓国農民は、泳いで会場に向かったのである。香港の一二月は、一年中でもっとも気温の下がる時期だ。この時期に海を泳ぐのは（しかも決してきれいな水とは言えない）ためられるところだが、韓国農民はそれを実践した。

その後も韓国農民の行動は続き、会議終了前日の一七日には、路上で通行人に花を渡したり、警察のピケを破ったり、また海を泳いだりした（Lo 2006 : 151）。これらのパフォーマンスは、通行人の関心をひくとともに、WTO 閣僚会議とその抗議行動に対するメディアの注目を集めた。「苦行」のもとになった「三歩一拝」は、一七日のヴィクトリア・パークから始まるデモにて行なわれ、韓国農民たちは、香港島の中心街を三歩進んではひざまずき、頭を下げることを繰り返した。最終的に、警察は、一〇〇〇人以上の参加者を一斉に逮捕することで強引にデモの幕を引いたのである。

直接行動は、二〇〇五年以前に、グローバル・ジャスティス運動における慣例のレパトリーとなっていた。そのきっかけになったのは、一九九九年一月末から二月初め、アメリカ・シアトルにおける反 WTO 行動である。「ブラックブロック」と呼ばれる対決的な行動者のネットワークが中心となり、スターバックスや GAP のようなグローバル企業の店舗を

攻撃したのは、直接行動の象徴的な事例である。このような行動は、二〇〇一年七月、ジェノバでの反 G8 イベントにおいても再現され、さらに、二〇〇三年九月、イタリア・メキシコのカンクンにおける反 WTO イベントでは、韓国の農民が警官と衝突するという出来事が起きた。

ブラックブロックの黒ずくめの服装とマスクに象徴されるように、直接行動は、ドラマのように鮮やかな光景を現出することで、メディアの注目を集め、問題の所在を人びとに知らせるというねらいがある。グローバル・ジャスティス運動の行動を、Jeffrey Juris は、「パフォーマンス的な暴力」と言う。彼女によれば、その行動には、公的な言論空間で周縁化されがちな運動の思想や価値を社会に伝える効果がある (Juris 2005 : 415)。

朱凱迪、葉寶琳、黃衍仁、陳景輝、周思中ら、後に反高鉄運動において中心的な役割を果たしたアクティヴィストは、反 WTO 行動の際に「三步一拜」に代表される一連の直接行動と出会っている。こうして、直接行動という抗議スタイルが、韓国農民を介して香港に持ち込まれた。いわば、それは、グローバルな運動とローカルな運動との出会いで生じた化学反応の産物であると言える。

第二に、「苦行」は、抗議行動の手法であるが、それだけではなく、「芸術」としての側面を有する (黄 2018 : 145)。反高鉄運動には、多数のアーティストが参加していた。その一人が、ミュージシャンの黃衍仁である。彼は、反高鉄運動の最中に、「苦行」についての曲 (「轉念始於足下寸土」) を作り、その曲がアクティヴィストの間で広く聞かれた。彼のようなアーティストの存在は、運動の直接行動のあり方に大きな影響を及ぼした。

黃衍仁は、二〇〇五年一二月に韓国農民の「苦行」を見て、目を見開かされるような思いをしたと言う。彼にとって、韓国農民が言葉を発するだけでなく、ドラムを叩いたり、身振り手振りをしたりして、身体を使って表現していたのは、衝撃的であった。それは、彼が過去に体験した香港のデモとは、まったく違うものであった¹⁶。

直接行動が芸術的な側面を有するとは、何を意味しているのか。路上と

いう舞台で、パフォーマー（「苦行者」）たちは、言葉だけでなく、身体を使って、観衆（通行人や視聴者）の感性に訴えかける。「苦行者」は、仏教の修行僧を想起させる。冬に裸足でアスファルトを歩き、長い道程を膝をついては起き上がることを繰り返すのは、彼らにとって肉体的に辛いものであり、日本語の文字通りの「苦行」である。

労苦を伴うパフォーマンスは、観衆の心に共鳴をつくり出すために行なわれた。陳景輝は、「苦行」を「美的行動」と呼んでいる。それは、観衆の五感、すなわち、見る、聞く、触る、臭う、味わう（彼らは菜園村産の農産物を路上で配ることがあったが、それは、嗅覚と味覚のような社会運動で通常はあまり訴えかけることのない感覚を刺激している）感覚を刺激する。そのために彼らは、デモ行進の時に流れる音楽、リズム、雰囲気、速度などにも気をかけた¹⁷。

「苦行」の全行程に参加した陳秉鳳は、自らのFacebook上に次のような記録を残している（「轉念，始於足下寸土」二〇一〇年一月一日）。上水から「苦行」を開始した直後、年配の男性に囲まれ、喧嘩が止まらず、結局、その場を離れることになってしまった。その後、「苦行」を再開したが、いったん太鼓が鳴り出し、彼女が一〇～二〇人の仲間とそれに合わせてゆっくりと前に進みだすと、通行人は突然静かになり、罵られることもなくなった。これは、「苦行」が観衆の感性に共鳴を引き起こしたことを示している。

第三に、「苦行」は、慣習的なものではないが、あくまで政治的表現の一つである。彼らの行動には、単なる文化的な表現であるだけでなく、高速鉄道の建設という政治方針をストップさせるというねらいがある。先に言及したように、香港では、市民の政治参加が制限されている。もっとも象徴的なのは、立法会の代表の選出である。彼らは、投票して議会代表を選出するという、自由民主主義の政治体制においては認められている権利を有していない。政治参加の方法が限られていることは、人びとの間に政治変革に対する失望やあきらめを蔓延させている。こうした香港の政治状

況の中で、「苦行」は、彼らが失望したり、あきらめたりすることなく、別の形での政治参加を可能にしている。

慣習的な政治参加の方法とは、投票で代表を選ぶことである。しかし、政治理論家のアイリス・マリオン・ヤングは、政治参加の慣習的な理解を見直し、より多様な行動を含めることを提案している。彼女は、ピケを張る、ピラを配る、ゲリラ映画館、路上のデモ、座り込みといった行動も、人びとによる政治的な表現の方法であると言う (Young 2001 : 673)。ヤングの議論を踏まえ、私は、政治的な表現としての直接行動には、他の表現方法と比べて、次の二つの特徴があることを強調したい。まず、直接行動は、政治的資源に欠ける人びとの武器である。政治的有力者とのコネを欠いていたり、政治献金をするための資金力を欠いていたりする者にとって、直接行動は、より手軽に実践することができる表現の方法だ。

このことは、「苦行」にもあてはまる。もちろん、支援者たちは、「苦行」の実践の前に周到な準備をしたが、その実践に、政治家や企業家の力を借りる必要もないし、巨額の経費がかかるわけでもない。「苦行」に要したのは、アイデアと実行力であり、それらは、高速鉄道の計画を止めたいと真剣に願う人びとの情熱が生み出した。

次に、直接行動は、言葉ではうまく表現できないことを示すのに適している。代表についての議論の中で、ヤングは、政治的に代表されるものを「利害」、「意見」、「パースペクティブ (perspective)」の三つに区分する。利害は、一人ひとりの生活に影響を与える (日本語では「損」と「得」という言葉で言い換えられる)。意見は、原則、価値、優先順位のような、物事がどうあるべきかについての判断や信念である (Young 2000 : 134-35)。パースペクティブは、経験、歴史、社会的知識の束を指す。異なる社会集団は、異なるパースペクティブを有する (沖縄の住民の近代史の見方が、日本列島のそれとは異なるというのは、その一例として挙げられる)。人びとは、パースペクティブを通して、社会的な出来事や現象を見る (Young 2000 : 136-37)。

三つのうち、利害は、比較的短い言葉で表現しやすい（「〇千万円の損失」など金銭のような数値に表わすことができる）。これに対して、意見は、価値観のように表現するのが容易でないものを含む。パースペクティブになると、たとえば、沖縄の住民が基地の受け入れを余儀なくされてきた経験のようなものなので、言葉で端的に表現するのは難しい。それゆえに、意見やパースペクティブは、身体を使った方が、うまく表現できる場合がある。

「苦行」は、菜園村民の価値観や経験のような、言葉では伝えづらいものの表現に挑戦した。先に言及したように、「苦行者」は、裸足で二六歩進んだ後、米（と種籾）を持って膝をつき、それを天にかかげた。当時、中学校の教員をしながら、仕事の合間を縫って「苦行」の企画に関わった鄭家駒（一九七八年生まれ）によれば、米は土地を象徴している。それをかかげることで、彼らは、高速鉄道の問題が「土地正義（land justice）」に関わることを示した。米を両手で持つのは、土地に対する敬意を体現しており、裸足になったのは、自らの身体が大地と直接接触することの意義を表わしている¹⁸。ここから、「苦行」が、支援者たちの意見やパースペクティブの身体的な表現であることがわかる。

陳秉鳳は、「苦行」が単なる高速鉄道への反対行動であるだけでなく、生き方を示していると言う。米をかかげる、ゆっくり歩くといった行為はすべて、あるべき未来の価値を描き出している¹⁹。彼女の言葉に基づけば、「苦行」の提示するのは、自然と調和し、地に足をつけた生き方である。これは、先に論じた芸術が政治参加に組み入れられたことの副産物である。生き方は、短い言葉で表現するのは難しい。芸術的パフォーマンスは、運動の表現を豊かにし、観衆により深みのあるメッセージを送ることを可能にした。

「苦行」の特徴について、第四に、それが非暴力に徹したという点を挙げられる。「苦行」が反グローバリズム運動に触発されて生まれたことは、先に指摘した。だが、「パフォーマンスな暴力」の評価は、グローバル・

ジャスティス運動内部においても論争的であった (Wood 2012 : 94-96)。途上国の債務問題に関する著作で国際的に著名なアクティヴィストであるスーザン・ジョージは、ジェノバでの反 G8 行動の後に、ブラックブロックを批判した。彼女は、ブラックブロックが、非暴力に徹しようとした地元グループの意向を踏みにじり、暴力を行使したと言う (Juris 2005 : 428)。Juris は、「パフォーマティブな暴力」が、ともすればメディア上で無視されがちなアクティヴィストの存在を可視化する一方、彼らの行動には (メディア上で) 犯罪というレッテルをはられ、さらには、警察からの弾圧を招く危険を伴うと指摘する (Juris 2005 : 428)。対決的な直接行動の効果は、予想し難いがゆえに、運動内部においても評価が分かれる。

反高鉄運動の支援者たちは、このようなリスクのある行動を回避し、非暴力に徹するという選択をした。とはいえ、彼らの全員が、絶対的な非暴力の原則に立っていたわけではない。非暴力が反高鉄運動の基本原則と見なされていたのは確かだが、時に非暴力を離れるのが必要な時もあると考える者もいた。しかし、彼らもまた、今回がその時ではないということでは見解を共有していた。非暴力の選択をしたのは、支援者という立場である自分たちにできることは、広く人びとの関心を高速鉄道問題に向けさせることであり、そのためには、非暴力的な手段の方が効果的であると考えたからだ²⁰。

反高鉄運動の「苦行」は、グローバル・ジャスティス運動のレパトリーに触発されたものではあるが、単なる借り物ではない。韓国農民の「三步」は、「二六歩」に置き換えられているし、「パフォーマティブな暴力」の使用も、香港の状況を踏まえながら控えられた。このことは、「苦行」が香港のローカルな文化や歴史に埋め込まれ、実践されたことを示している。

第五に、「苦行」は、メディアの注目を獲得するのに効果的である。「苦行」のメディア効果は、すでに WTO 反対運動の時に証明済みである。韓国農民の「苦行」は、通行人の支持を獲得し、さらにメディアでも数多く報道された (Lo 2006 : 155)。

新聞社に関して言えば、反高鉄運動の「苦行」をもっとも積極的に報じたのは、香港政府の方針に批判的な記事を出すことで知られている『蘋果日報』である。最初は、二〇〇九年一二月一七日の記事（「青年赤足苦行 圍立會反高鐵」）で、「八〇年後反高鉄青年」が気温一四度の寒い中で足を赤くしながら立法会の外を「苦行」しているという記事を写真入りで報じている。また、『蘋果日報』は、二〇一〇年一月五日、「四日三夜」の出発前に、黃衍仁や陳秉鳳らを「苦行五子」と呼び、ここでも写真入りで紹介している（「80 後苦行五子抗野蠻劣政」）。この記事は、各自の経歴や反対の理由にも紙面を割き、彼らがなぜ「苦行」をするのかを知ることができるのも特徴である。

『蘋果日報』以外にも、各社が「苦行」を報じている。比較的目立つところで、『星島日報』は、二〇一〇年一月六日の記事（「『80 後』 青年上水反高鉄苦行」）において、上水での「苦行」を報じている。「苦行者」のプロフィールだけでなく、記事は「苦行」の様子の詳細に及んでいる。年配の通行人が彼らを罵倒したこと、別な人は彼らのビラを受け取り、読んだ後に「苦行者」の行動の意義に理解を示すようになったことも報じている。記事の最後には、彼らの今後の行動予定も記されている。

最大の売り上げを誇る『東方日報』は、二〇〇九年一二月一七日の記事（「冒寒苦行反高鉄」）で、立法会前の「苦行」を写真入りで報じ、また、そのねらい（村民の生活を守るよう議員に訴える）も記されている。二〇一〇年一月七日の記事（「反高鉄撥款恐流血暴動」）の前半では、ネット上の情報をもとに、反高鉄運動が「流血暴動」を起こす可能性があるとして注意を喚起している。他方、後半では、非暴力行動に徹するという葉寶琳の言葉とともに、「苦行」の写真も掲載している。「苦行者」が地面に膝をつき手を掲げる姿は、「流血暴動」というおどろおどろしい見出しから想像させる光景からかけ離れており、記事前半の論旨の説得力を大きく損ねている。

以上の議論が示すように、新聞社（のイデオロギーの違い）によって、

その扱われ方こそ異なるものの、彼らが「苦行」に注目して記事のスペースを割いたという点では共通している。『東方日報』のように、反高鉄運動に対して「暴力」というレッテルを付与したい(政治的)意図が見える場合にも、「苦行」のパフォーマンスの写真によって、その意図は裏切られてしまっている。

四節 農の発見

反高鉄運動のもう一つの遺産は、「本土(ローカル、後述)」の暮らし方として農を基盤にした生活が発見されたことである。そもそも、長く香港島や九龍半島の住民にとって、新界は遠い場所であった。彼らの多くは、新界のことをあまりよく知らなかった。香港南部から新界を結ぶトンネルが開通し、フェリーに乗らなくても南から北に移動できるようになったのは、一九七二年のことである(Hayes 2006: 171)。交通の不便さも相まって、新界に固有な歴史や文化は、都市部の住民には十分に知れ渡らずにいた。

新界をよく知らなかったのは、菜園村民の支援者においても同じである。彼らは、私の取材に対して、菜園村民との交流を通して、これまで知らなかった香港の一面に気づかされたと話している。菜園村民との出会いから、支援者たちは、いかなる発見をしたのだろうか。彼らが共通して指摘するのは、「コミュニティの感覚」の発見である。

先出の陳秉鳳は、菜園村の他とは異なる「生活の質感」にひきつけられたと言う。彼女は、そこに「村民の環境、土地、自分の居場所と数十年来の生活の累積」を感じ取った(菜園留覆往來人: 91)。彼女は、公営の高層ビルの住居で育ち、近隣住民との交流らしき交流を経験したことがなかった。そんな彼女の目には、食べ物をシェアし合う村民の生活スタイルは、新鮮に映ったのである。

陳秉鳳と同じく中文大学の学生であった陳倩玉もまた、異質な空間の感覚にひかれた支援者の一人である。彼女は、そこに「有機的なコミュニティ

（社區）」の姿を見たと言う。陳倩玉は、都市部（新界東部の大埔）で育ったこともあって、コミュニティの感覚というのは、彼女にとって縁遠いものであった。それゆえに、彼女は、菜園村に「緊密で着実な生活経験」があることに驚いた。村民は、互いのライフストーリーを知っており、日常的な交流も頻繁である。彼女は、村民が高速鉄道の計画を聞いてから短期間で反対の組織を起すことができたのは、このような交流がすでに存在していたからだと言う（余，陳，陳 2013：92）。

陳秉鳳と陳倩玉の言葉から分かるように、支援者の多くは、最初、高速鉄道建設計画という政府の方針に反対して、現地の事情をよく知らずに菜園村に足を運んだ。しかし、村民と交流し、彼らのコミュニティや土地に対する感情を知るようになり、コミュニティや土地を守ることの意義を理解するようになったのだ。

私は、二〇一四年八月と二〇一七年七月に菜園村（すでに旧村は閉鎖されていたので、近隣の八郷地区に再建された菜園新村）を訪問した。二〇一七年の訪問の同行者は、支援グループの一員であったが、彼が村を歩いているとすぐに声をかけられ、家に入れられて雑談し、「ご飯食べるか」と尋ねられ、話を終えて歩き出してはまた同じように声をかけられることを繰り返した。彼の訪問予定の村民たちは、留守であった。それは、彼らが近くで麻雀をしていたからだ。男女問わず人が四人揃うとすぐに麻雀するのは、この村では日常なことだと聞かされた。ちなみに、菜園旧村の取り壊しの直前、二〇一一年の春節に村で開かれたイベントには、「新春糊土托」という名称が付けられた。これは、「麻雀」と「ウッドストック（一九六九年八月、大規模な野外ロックフェスが開かれたアメリカの町の名前）」をかけたものであり、いかに菜園村民の間で麻雀（を通じての交流）が日常的なものであるかを示している。

菜園村のコミュニティ意識は、近年の香港の市民社会において流行している「本土」という言葉を思い起こさせる。「本土」とは、日本語に訳しにくい概念だが、英訳される場合には、「ローカル（local）」という言葉が

使われることが多い。愛着を持った生活の場(「ホーム」や「地元」)を指す言葉である。「本土」は、二一世紀に入ってから政治的な言語として頻出するようになり、実際に反高鉄運動の参加者の中には、埠頭保衛運動において「本土行動(local action)」という名前のグループに所属していた者も少なくない。

羅永生によれば、香港における「本土意識」の第一波は、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて現われた。その主たる担い手は、戦後、香港に生まれ、育ったベビーブーマーである。彼らは、香港を一時的な避難場所とは見ていない。そうであるがゆえに、彼らは、香港における社会問題や不正義の存在に関心を寄せた。彼らは、「左(中国共産党)」か「右(イギリス植民政府)」という、社会問題を論じる時に直面する二項対立的なイデオロギーに嫌悪と懐疑を感じており、紋切り型の枠組みから抜け出しようとした時、香港アイデンティティを発見した(羅 2014=2014: 122-124)。

「本土意識」の第二波は、一九八九年の天安門事件の後、一九九〇年代に広がった。すでに香港が中国に返還されることが政治的に決定しており、香港の歴史や文化が中国ナショナリズムに圧倒されてしまうことに対する懸念が広がっていた。第二波の「本土意識」は、コスモポリタンな国際都市としての香港という自己認識と結びついていたので、そこでは、返還後も香港の多元性や多国籍性を守るという主張が展開された(羅 2014=2014: 131-134)。

羅永生は、「本土意識」の第三波の象徴的な出来事として反高鉄運動を位置づけている(羅 2014=2014: 134-137)。その運動の後に、「本土」とは何かという 이슈が、知識人やアクティヴィストの間における論争的になった。ただ、反高鉄運動の支援者たちが発見したのが、抽象的な論争の対象としての「本土」からは区別されることを強調しておきたい。彼らは、「本土」、すなわち、ローカルの姿を菜園村民の具体的な生活様式の中に見つけたのだ。

影行者, 菜園村支援組製作, 陳彥楷監督の『鐵怒沿線—菜園記事』(二

〇〇九年）というドキュメンタリー映画は、支援者たちの発見がいかなるものであったのかを教えてくれる²¹。私は、別稿（安藤 2018）で支援者たちがいかに菜園村の住民から影響を受けたのかを論じたので、ここでは詳述しないが、本稿の論旨に即して以下のことを改めて強調しておこう。黃衍仁の言葉を借りれば、支援者たちは、自分で食べ物をつくり、それを近隣住民とシェアし合う村民の暮らしに「資本主義の夢」から醒めた後の生き方のモデルを見たのである。

先述のように、支援者の一人である陳景輝は、菜園村民の暮らしに「時間の蓄積」を見ていた。だが、その蓄積は目に見えるものではないし、高速鉄道の計画によって永遠に失われようとしていた。そこで、村民の暮らしに魅力を感じた支援者たちは、彼らの歴史を掘り起こすことにした。村民から聞き書きして村の故事を書き留めたのである。この聞き書きは、「菜園故事系列」というタイトルで、二〇〇九年五月から『香港獨立媒體』に連載されている。

彼らの聞き取りは、二〇一〇年一月、高速鉄道の予算が立法会を通過し、村民の移住が決定した後も続いた。なぜなら、移住先で農を続けるために必要な「復耕牌」の発行に、村民が旧村で農を営んでいたことの証明をしなければならなかったからである。支援者たちは、グループで分担して村民に聞き取りを行ない、彼らの証明書の作成を手伝った（この記録は、余、陳、陳、2013、に掲載されている）。

村民の暮らしの聞き書きは、高速鉄道が奪おうとしている人びとの暮らしに光をあてている。高婆さんの場合、彼女は、若い時に大陸から香港にやって来た。市街地には家を持つのが難しかったので、菜園村に居を定め、五〇年以上になる。その間に、少しずつ貯金をして、家を建てた。田んぼや畑を耕作して種を播き、果樹を植え、鶏や豚を飼い、六人の子どもを育て上げた²²。

「菜園故事系列」によれば、高婆さんと同じように、菜園村の住民の多くは、一九五〇～六〇年代に、主に大陸から移住してきた。中国大陸の混

乱を避けて菜園村にやって来た移住者たちは、一九七〇年代までに農を基盤にした生活を確立させ、彼らの間には村への愛着も芽生え始めた。一九八〇年代以降、香港における野菜の価格が低落し(その背景には中国の改革開放がある)、農業で生計を立てることが困難になり、若い世代には村を出ていく者が増えている。それでも残った村民は、子どもが親の手を離れた後も、食べ物を目給しながら暮らしてきた。再度強調すれば、菜園村は、移住者の村である。彼らにとってそこは、最初は「借りてきた場所」であったかもしれないが、暮らしの営みの積み重ねを経て、次第に愛着のある故郷になっていった。「菜園故事系列」には、香港や中国の正史からはこぼれ落ちてしまう、「小さな民」や「庶民」の暮らしが描かれている。

菜園村民の生活様式の中で、とりわけ支援者の注目をひいたのが、農である。反高鉄運動を通して、支援者たちは、香港において限られた資源である土地をどう使うのかという問題に直面させられた。高速鉄道の推進者たちは、農地を商業施設や住宅施設に変えることが、香港の「発展」にもっとも有効な方法であると主張した。これに対して、反高鉄運動の支援者たちは、この開発が持続可能ではないとして、真っ向から対立した。

香港における開発イデオロギーの力は、強力である。過去の成功体験をもとに資本主義的開発なくして香港は生きていけないという信念は、世代を超えて香港の人びとの間に深く浸透している。それにもかかわらず、支援者たちの開発批判は、自信に溢れるものだった。この自信の源になったのは、彼らが見た菜園村の住民の姿である。村民は、土地を売らなくても(非「原居民」なので、そもそも売る権利もない)、それを有効に使う(耕し、家を建て)、堅実に食べてきた。この事実は重い。土地を使って食べるための方法が、農である。それゆえに、彼らの言葉を使えば、「農業には、人の理がある(農業有人理)」のだ(「石崗菜園導賞團」)。

高婆さんがモデルになったことからわかるように、ここで言う農とは、大規模な土地に米、野菜、果物を大量に作ってそれを市場に販売するというスタイルではない。決して広いとはいえない土地で、自分の食べる物を

作り、余分にできた物を近隣住民や友人におすそ分けしたり、露天で売ったりする農である。菜園村民の生活の事実を目の当たりにしながら、支援者たちは、土地の価値が、商業的な価値には還元されないと主張した。土地の価値とは、それがたとえどんなに狭くても、生きるのに必要な物を生み出し、人びとを生かしてくれるところにある。

だが、香港における支配的な考え方（「発展主義」）においては、土地と農はあくまで商業的な観点以外の評価尺度を持たない。そうすると、彼らの土地と農の成果物である農作物は、（市場価格が低いので）極めて低い評価しか与えられないことになる。菜園村民が移住を受け入れた後、政府は、彼らの畑にある農作物に賠償金を設定した。その金額には、一年間に収穫される野菜や果物の価格しか算定されておらず、不当に低いものであった。政府には、土地が継続的に収穫物の恵みをもたらす（果樹であれば翌年以降も実を収穫できる）という観点が抜け落ちているがゆえに、彼らの成果が叩き売りされてしまったのだ（「停止 菜園村清場 落實 先建屋後搬村」のチラシ）。このことにも、農に対する低い評価が表われている。

土地の価値に対する異なる見方を学んだことは、彼らが生存の方法として農を発見することにつながった。先にも指摘したように、支援者たちは当初、高速鉄道の計画に反対するために村に入ったのであって、その発見は、彼らにとっても、予想外の展開であった。したがって、農の発見は、反高速鉄道から「溢れ落ちた」（Meyer and Whittier 1994）ものである。こうして、「資本主義の夢」が消え去った後に、彼らは、農を基盤にした自律的な暮らしという生き方のモデルに出会ったのだ。

おわりに

本稿では、二〇一〇年一月一六日、立法会で予算が通過した時点までの反高鉄運動を跡づけてきた。その経過が示すように、運動は香港の「中国化」（だけ）でなく、資本主義的な開発の是非をめぐる争った。これは、

最近の高速鉄道開通のニュースでは見逃され、忘れられている論点である。

運動は予算の通過を持って終わったわけではない。その後も、菜園村民は、様々な困難に直面した。彼らは、数多くの話し合いを経て村ごとの移転を望んだが、政府から移転の許可がなかなか下りなかった。また、菜園新村の移転に際しても、新村の設計をめぐる議論や建設工事の遅れなどの苦労が絶えなかった。その過程で本稿に登場した支援者たちは、村民に寄り添い続けてきた。これもまた、反高鉄運動の重要な一幕である。

反高鉄運動の参加者は、二〇一〇年一月、予算が立法会を通過する直前、もっとも動員規模が拡大した時期でさえも、主催者発表で一万三〇〇〇人を数えている(李峻嶸 2015: 99)。それは、最大で五〇万人の参加者を数えた「七一デモ」、測定すること自体が困難な雨傘運動の巨大な動員と比べれば、はるかに小さな行動に過ぎない。それでも、私は、反高鉄運動が、その後の市民社会に播いた種を重視している。路上における抗議行動に参加した人数の数字だけを見ているだけでは、その影響の大きさと広がりを理解できないと考えるからだ。

本稿は、反高鉄運動が播いた種として非暴力直接行動と農の発見の二つを挙げた。さらに、反高鉄運動は、それと出会った人びとの心に強い印象を残した。冒頭に甘傘運動の黄之鋒の経験を述べたが、彼だけでなく、新界東北開発反対運動のリーダーの一人である何潔泓^{ウイリス・ホー}にとっても、反高鉄運動は、自らが政治参加するきっかけになっている(陳奕廷 2015: 188)。それは、一九九〇年代生まれのアクティヴィストにとっての社会運動の原体験となったのだ。

また、先出の鄭家駒の場合、勤務先の中学校の校長が反高鉄運動を好意的に見ていて、彼は、定例の全校集会の場で、反高鉄運動について生徒に話す機会を与えられ、彼の生徒や同僚たちは、そこで運動について知らされた。メディアの光のあたらないような場所でも、人びとは反高鉄運動と出会っている。

広東語圏で人気の二人組のインディーポップバンドである My little airport

の「宅女、上街吧」という歌に、反高鉄運動が登場する。「宅女」というのはオタクの女性という意味であり、詞中には仕事や学校以外には外に出ないで家でネットをしている人びとも街に出ようと呼びかけている。反高鉄運動からの呼びかけを真剣に受け止めた人びとは、その後、それにどう応えていったのか。この問いを検討することを、私は自らの次の課題としたい。

謝辞

本稿には、科学研究費補助金「香港のフードアクティヴィズムと民主化運動」（課題番号 16K17239）の支援をいただきました。また、藤井達夫さん、小須田翔さん、森達也さんには、草稿に貴重なコメントをいただきました。記して御礼申し上げます。

註

- 1) 「一地両検」とは、高鉄の出入境審査を一箇所で行なうことを指す。西九龍駅に香港側と中国側双方の税関・出入境管理所を設置するため、中国政府の職員が香港の領域で出入境を審査する。一国二制度に矛盾するとして香港で反発の声が高まっている。
- 2) たとえば、「広州と香港結ぶ高速鉄道開通」『日本経済新聞』二〇一八年九月二四日、四面。
- 3) 二〇一七年に予定されていた香港特別行政区の行政長官（政治のトップ）の選挙に、中国共産党の全人代常務委員会が候補者を事前に選別する方式を採用したことに端を発する抗議行動。二〇一四年九月から一二月にかけて、抗議者たちは、銅羅湾、金鐘、中環、旺角など、香港島と九龍半島の主要地区を占拠し、「真普選（真の普通選挙）」を求めた。
- 4) 政府と経済界が主導し、新界東北部に住宅と商業施設を建設する計画。環境や農業の破壊、中国との一体化などを憂慮する人びとから激しい反対を受けている。計画は一九九八年に持ち上がり、二〇〇七年以降本格的に進展。二〇一四年六月には立法会で予算が決議された。
- 5) 私は、反高鉄運動とその遺産を考察することには、香港の地域研究に限定されない、以下の二つの意義を有すると考えている。第一に、今日の香港は、東ア

ジアにおいて貧富の格差のもっとも大きな国や地域の一つである。香港政府は、一九七〇～八〇年代の開港の成功体験を追い続け、政策転換をはかれずにおり、その結果として人びとに十分な社会保障を提供できていない。また香港は、過去にイギリス、現在は中国という大国の政治的な影響のもとにあり、人びとは市民的自由と政治的自由を制限されてきた。このように香港は、資本主義や植民地主義の中で生じている諸問題が集約的に表われている場であり、香港を見ることで資本主義と植民地主義の渦中で生きることの困難を良く理解することができる。第二に、本稿で見ていくように、香港では生存のかかった人びとが新たな文化を生み出している。私は、そこで創造されている技術と知恵には、困難な状況を生き抜くためのヒントにあふれていると考える。そのヒントに学ぶことができるのは、香港の人びとだけではない。同じように荒波を生きているすべての人びとに向けて、ポスト資本主義やポスト植民地主義のヴィジョンを与えるものであるに違いない。

- 6) 独立媒體は、「七一デモ」の衝撃を受けて設立された。初期にはヨーロッパの基金の支援を受けていたが、主たる財源は個人による小規模の寄付からなっている。独立媒體は、中国語のウェブサイトを立ち上げ、そこに主流メディアには掲載されないようなイシューや観点の記事を掲載する。また、韓国のオーマイニユースの経験に学び、トレーニングを受けた市民記者を導入している点に特徴がある (Ip Lam-chong 2011 : 226-27)。
- 7) <https://www.hkpopop.hku.hk/chinese/popexpress/ethnic/eidentity/poll/datatables.html> (二〇一八年八月三十一日 DL)
- 8) 陳景輝さんインタビュー、二〇一七年七月二九日。
- 9) 「功能組(界)別 (Functional Constituency)」は、業界団体や職業団体の代表で、現在、立法会に三五名の議員を送り出している (議員総数は七〇)。業界としては、工業界、医学界、保険界、法律界、教育界などがあり、投票者は組織や企業のような法人を含んでおり、一般の構成員が投票できるわけではない。議員の多くは中国政府に近い立場にある者から構成されている。
- 10) 香港と中国との間の経済提携協定。貿易の自由化だけでなく、人の移動の規制緩和も盛り込まれている。二〇〇三年六月に本文を締結。
- 11) <http://www.info.gov.hk/gia/general/200804/22/P200804220142.htm> (二〇一八年八月三十一日 DL)
- 12) 陳景輝さんインタビュー、二〇一七年七月二九日。
- 13) 黃衍仁さんインタビュー、二〇一八年二月三日。
- 14) 陳秉鳳さんインタビュー、二〇一八年二月四日。
- 15) 朱凱迪「高鐵戰訊【倒數三天】：五區苦行開始!」『香港獨立媒體』二〇一〇年一月五日。

- 16) 黄衍仁さんインタビュー，二〇一八年二月三日。
- 17) 陳景輝さんインタビュー，二〇一七年七月二九日。
- 18) 鄭家駒さんインタビュー，二〇一八年二月二日。
- 19) 陳景輝さんインタビュー，二〇一七年七月二九日。
- 20) 蔡卓陽さんインタビュー，二〇一八年二月四日。
- 21) 陳監督の反高鉄作品は，三部作である。第二作は、『鐵怒沿線—華路藍縷』（二〇一〇年），第三作は、『鐵怒沿線—三谷』（二〇一一年）。五時間にも及ぶ大作の第三作は，二〇一三年の山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映され，「アジア千波万波 奨励賞」に選ばれた。
- 22) 葉寶琳「八十歳菜園村民高婆婆：我會頼在這裡」『香港獨立媒體』二〇〇九年五月一八日。「菜園新村入伙 89 歲高婆婆重回田園生活」『香港獨立媒體』二〇一六年二月二七日。

参考文献

日本語

- 安藤丈将，2018，「『土』からの変革を求めて—菜園村生活館からみえる香港」，川端浩平，安藤丈将編，『サイレント・マジョリティとは誰か—フィールドから学ぶ地域社会学』，ナカニシヤ出版：177-195。
- 倉田徹，2009，『中国返還後の香港—「小さな冷戦」と一国二制度の展開』名古屋大学出版会。
- 福島綾子，2009，『香港の都市再開発と保全—市民によるアイデンティティとホームの再構築』九州大学出版会。
- 遊川和郎，2017，『香港—返還 20 年の相克』，日本経済新聞出版社。

英語

- Chen, Yun-chung and Szeto, Mirana M., 2015, "The forgotten road of progressive localism: New Preservation Movement in Hong Kong" in *Inter-Asia Cultural Studies*, 16-3: 436-453.
- Chiu, Stephen W. K. and Li, Hang, 2014, *Contentious Politics in Two Villages: Anti-High-Speed-Rail Campaigns in Hong Kong and Taiwan*, Hong Kong: Hong Kong Institute of Asia-Pacific Studies.
- Dapiran, Antyhony, 2017, *City of Protest: A Recent History of Dissent in Hong Kong*, Hawthorn: Penguin.
- Hayes, James, 2006, *The Great Difference: Hong Kong's New Territories and Its People*

- 1898-2004, Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Ip Lam-chong, 2011, "Hong Kong In-Media" in John D.H. Downing (ed.), *Encyclopedia of Social Movement Media*, London: Sage Publication: 226-27.
- Juris, Jeffrey S., 2005, "Violence Performed and Imagined : Militant Action, the Black Bloc and the Mass Media in Genoa", in *Critique of Anthropology*, 25-5: 413-432.
- Ku, Agnes Shuk-mei, 2012, "Remaking places and fashioning an opposition discourse: struggle over the Star Ferry pier and the Queen's pier in Hong Kong" in *Environment and Planning D: Society and Space*, 30: 5-22.
- Lai, Carol P., 2007, *Media in Hong Kong: Press freedom and political change 1967-2005*, London: Routledge.
- Lam Wai-Man, 2004, *Understanding the political culture of Hong Kong: The paradox of activism and depoliticization*, Armonk: M.E. Sharpe.
- Lee, Francis L. F., and Chan, Joseph M., 2012, *Media, Social Mobilization, and Mass Protests in Post-Colonial Hong Kong*. New York; London: Routledge.
- Meyer, David S., and Whittier, Nancy, 1994, "Social Movement Spillover", in *Social Problems*, 41-2: 277-298.
- Wong, Joshua, 2015, "Scholarism on the march" in *New Left Review*, 92: 43-52.
- Wood, Lesley J., 2012, *Direct Action, Deliberation, and Diffusion: Collective Action after the WTO Protests in Seattle*, New York: Cambridge University Press.
- Wu Xiaogang, 2010, *Hong Kong's Post-80s Generation: Profiles and Predicaments*, The Hong Kong University of Science and Technology. http://www.cpu.gov.hk/doc/tc/research_reports/HK%27s%20Post%2080s%20Generation%20-%20Profiles%20and%20Predicaments.pdf (二〇一八年八月三一日 DL)
- Young, Iris Marion, 2001, "Activist Challenges to Deliberative Democracy" in *Political Theory*, 29-5: 670-690.
- Young, Iris Marion, 2000, *Inclusion and Democracy*, Oxford: Oxford University Press.
- Lo Shiu-hing, 2006, "The Politics of Policing the Anti-WTO Protests in Hong Kong", in *Asian Journal of Political Science*, 14-2: 140-162.

中国語

- 陳奕廷, 2015, 『傘裡傘外：民主前夕的香港故事』, 水牛文化。
- 蔡耀昌, 2015, 「零零三年以來的香港社運新貌及其結構根源」, 鄭宇碩編, 『香港政治參與新型態』, 香港城市大學當代中國研究計劃: 81-100。
- 余在思, 陳秉鳳, 陳彥楷, 2013, 『菜園留覆往來人』, 菜園村支援組。
- 林緻茵, 黃偉國, 2015, 「互聯網與本土政治」, 鄭宇碩編, 『香港政治參與新型態』, 香港城市大學當代中國研究計劃: 137-159。

- 李峻嶸, 2015, 「超越『和平理性』? 香港年青社運參與者的政治參與」, 鄭宇碩編, 『香港政治參與新型態』, 香港城市大學當代中國研究計劃: 101-117.
- 羅永生, 2014, 「香港本土意識的前世今生」, 『思想』, 26: 113-151. =2014, 宮本司訳, 「香港本土意識の前世と今生」, 『MAT アジア現代思想』, <https://matnt.org/>【article】香港本土意識の前世と今生/ (二〇一八年一〇月一日 DL)
- 黃宇軒, 2018, 「藝術與抗爭: 雨傘運動中的政治參與」, 鄭焯, 袁瑋熙編, 『社運年代: 香港抗爭政治的軌跡』: 141-156.
- 鄭焯, 2018, 「香港新興社運的架構和劇目」, 鄭焯, 袁瑋熙編, 『社運年代: 香港抗爭政治的軌跡』: 37-54.
- 張少強, 2016, 『管治新界: 地權, 父權和主權』, 中華書局(香港)有限公司.
- 朱凱迪, 2012, 「菜園新村導賞團記」, 馬家輝, 梁文道, 王慧麟, 『香港本土論述 2011: 本土的性與別/想像新界』, 漫遊者文化: 153-167.